

『ジエツト推進学塾』

笠羽流雨

《登場人物》

ヒロ…………天才

塾生1…………パティシエ

塾生2…………予言者

塾生3…………エンジニア

先生…………ジエット推進学塾の先生

校長…………ジエット推進学高校の校長

○天才の苦悩

満点の答案の束を持って高校の制服を着たヒロ登場。

ヒロ(独白) 百点。百点。百点。これも百点……。僕の名前はヒロ。高校三年生。俗にいう、神童だ。勉強に関してはもちろん、芸術、スポーツ、カリスマ性、どれをとっても僕は常に一番になってしまう。自分が天才だと気づいたのは三歳の頃、メリエスの『月世界旅行』という映画をみていた時だった。「それ」は突然降りてきた。僕は突然、自分は今月に行くべき選ばれた人間なのだと感じたのである。そうだ、これはきつと啓示なのだ。偉大な人間は皆、天からの啓示を経験する。ナポレオンが英雄になったのだって、そういう定めだからそうなったというだけのことなのだ。そうして、その「定め」というやつが僕にもきてしまったのだ。なんてことだ。僕は人類の代表者として宇宙へ行かなければならぬ。僕は英雄なのだ。しかし、ここまで自分の才能が周囲に比べて圧倒的だと、張り合えない。うちの高校だって、一応は進学校。しかし、進学校といえども、所詮は受験勉強に特化した秀才のたまり場に過ぎない。校長ときたら入学初日から「君たちは選ばれた人間だ！」なんて臆面もなく新入生に言うものだから僕は思わず吹き出してしまったよ。選ばれるってのは、そういうことじゃないんだよ、校長先生。今年の受験で僕は間違いなく東大に合格するが、それは通過点に過ぎない。僕は僕と同じように真に選ばれた才能ある人間、すなわち宇宙へ飛び立つ人類の代表者たる人間たちとの真の友情を築きたい。それが無い限り、僕はこの星で孤独なのだ。そう、ヒーローはいつも孤独なのだ……。

○入塾

街の喧騒。

無数の広告が並んでいる。

先生、予備校の案内のパンフレットを配っている。

ヒロ ああ、退屈だ。街は今日も退屈で溢れかえっている……。

先生 お願いしまーす。お願いしまーす。あ、どうぞ。

ヒロ チラシならいらぬです。

先生 いやペンも入っていますから、それだけでも。

ヒロ 僕はモンブランのマイスターシュティック49しか使わないのです。

先生 ほう、それは私とお揃いだ。

ヒロ ……予備校ですか？

先生 進学塾です。

ヒロ 塾？ 僕はすでに、

先生 高校の範囲は完璧だ、と仰りたいのでしょうか。

ヒロ その通りです。

先生 うちの塾は単なる進学塾ではありません。ジェット推進学塾です。

ヒロ ジェット推進？ いい響きですね。

先生 眼を見れば分かる。君は選ばれた人間だ。うちのジェット推進学塾はそういう天才だけを集めた塾なんです。世界中から若き才能がここに集結しているというわけですな。実際、塾生には国際学会で輝かしい業績を残している人も大勢いるんですよ。

ヒロ 要するに、塾と言いながら実際は大学院や研究所のような場所ということですか？

先生 その通り。

ヒロ 面白いですね。入塾しましょう。

先生 流石、天才は決断が早い。ああ、これは詐欺の類ではありませんからね。

ヒロ 僕は極真空手の世界チャンピオンですよ。詐欺だったら困るのはあなた方だけだ。

先生 塾生には総合格闘技世界チャンピオンと相撲の元横綱がいます。

ヒロ ……ほう、そりゃ面白い。

先生 では、こちらへどうぞ。

二人、階段をコツコツ上がっていく。

ヒロ 随分長い階段ですね。
先生 うちがジェット推進ですから。
ヒロ ほう。

階段をコツコツ上がっていく。
長い沈黙。

ヒロ これはあと、
先生 もうすぐですよ。

階段をコツコツ上がっていく。

ヒロ 螺旋階段ってのはこう、ぐるぐる回って、同じことの繰り返し、もう
少し面白くてできないもんでしょかね。
先生 ほう。面白い着眼点ですね。

階段をコツコツ上がっていく音。

ヒロ そうだ、あなたのことは、なんとお呼びすればいいでしょうか。
先生 ん？ 先生と。
ヒロ 先生は弱っちゃうな。学校みたいでつまらないよ。
先生 ほう。では、そうですね……。

カラスの鳴き声。

先生 では「バード」と呼んでください。
ヒロ よろしく、バード。
先生 よろしく。へへ。

階段をコツコツ上がっていく。

先生 時にヒロ君、君はバベルの塔を知っているだろうね。
ヒロ ちょうどいまそのことについて考えていたよ。人類の英知の結晶だ。
先生 しかし、あまり天に近づき過ぎてしまったので、大いなる力によって壊されてしまった。

ヒロ バードはその話が好きなの？

先生 いや、別に。ただ……。

ヒロ ただ？

先生 この階段はあんまり長いんで、私はいつも上っている間バベルの塔について考えるんだ。

○歓迎会

先生、扉を三度ノックする。

先生 皆さん、新しい塾生の方が来ましたよ。

扉が開くと同時に数発のクラッカーのはじける音。

塾生1 ようこそ！

塾生2 我らがジェット推進学塾へ！

拍手喝采。口笛も聞こえる。

ヒロ どうも、よろしくお願いします。ヒロと申します。

塾生1 仲間が増えてうれしいよ。早速歓迎会をしようじゃないか。

ヒロ 歓迎会？ 誰の？

塾生2 もちろん君さ。もう、ケーキも用意できてるんだ。

ヒロ いやに準備がいいな。僕が来るのが分かっていたみたいだ。

先生 この塾には予言者もいるんだ。だから、今日君が来るのは分かっている。

たんだよ。

塾生1 皆、君のことを心待ちにしてたんだ。

塾生2 僕が予言者のリストだ。よろしく。

ヒロ よろしく。……なんでもありだな。

先生 まあ、うちはジェット推進だから。

ヒロ ほう。

先生 ね、どうかな？ みんな愉快な人たちでしょう。

ヒロ 愉快というかなんというか。

先生 彼らも君と同じ天才なんだ。ヒロ君もすぐに分かるよ。

ヒロ 天才ねえ。

先生 ここには天才しかないない。

ヒロ 天才ってのはそんな滅多にいるもんじゃ、

塾生1 おっとと。気をつけて運べよ。

塾生2 分かってるよ。ちよっと、そこあけて。

先生 来たな……。

ヒロ は？

塾生2、巨大ケーキを置く。

塾生2 ふーい。

ヒロ こりやでかいや。

塾生2 塾生にはお菓子作りの世界大会で優勝したパティシエもいるんだ。

塾生1 そのパティシエってのが私だ。私はな、

ヒロ こんなでかいケーキは見たことがないよ。それにいい香りがする。

塾生1 私は、

先生 どうやって切り分けようか。

塾生2 平等に切り分けるべきだろうな。

塾生1 公平に切り分けるべきだと思う。

先生 君はどう思う？

ヒロ 必要性に応じて切り分けるべきだと思います。この量はとても食べきれないから、余ったのは冷蔵庫に戻すべきでしょう。

先生 面白い意見だ。ヒロ君の意見に賛成の者は？

塾生1 賛成です。

塾生2 僕も賛成です。

先生 よおし、民主主義によって、ヒロ君の意見を採用することにしよう。

塾生1 民主主義万歳！

塾生2 うわ、うまい。

塾生1 もう食べてるよ。相変わらず食うのが早いな。

ヒロ じゃあ、僕もいただこうか。どれどれ、あ、これは凄くうまいぞ。

塾生2 ほっぺたが地球の中心まで落ちそうだよ。

塾生1 そうだろ、私は天才だからね、何を作ってもとびきりうまくなっちゃうんだ。

ヒロ なるほど。確かに天才かもしれないな。

先生 いやあ、しかし、いよいよ定員が集まったねえ、おめでとう。

塾生1 ほんと、この日をどれだけ待ちわびたか。

塾生2 今日のためにここまで頑張ってきたんだからなあ。感慨深いよ。

塾生1 楽しみだねえ。

塾生2 うん。あ、でも僕の予言では、

ヒロ なんの話です？

先生 いや、なにジェット推進の話だよ。なあ。

塾生2 楽しみだなあ。僕の予言、

ヒロ ところでこの部屋には塾生二人に先生一人しかいないようだけど、他には誰もいないんですか？

先生 他の皆はいまエンジンと発射台の最終チェックをしてるよ。

ヒロ え？

先生 一緒に挨拶しに行こうか。

○エンジンルーム

ギギギという歯車の音。その他の機械音。

塾生3、軍手をして作業をしている。

ヒロ、先生入ってくる。

先生 予言者が言っていたヒロ君が来ましたよ。

塾生3、作業の手を止める。

塾生3 待ってたよ。君がヒロ君か。

ヒロ ああ、そうだよ。

塾生3 俺はジェット推進学塾のエンジンクラスで、ロケットエンジン開発の責任者をやってる男だ。

ヒロ よろしく。で、この馬鹿でかいのが燃料タンクかい？

塾生3 ああ、こいつは世界最大だからな。

ヒロ どおりで上がっていくとき階段が長いと思ったよ。ロケットだったのか。こりゃ大したものだ。

塾生3 そうだろ。このエンジンで上の教室ごと宇宙へ飛ばすって算段さ。

ヒロ そりゃいいね。じゃあ、我々は宇宙でも勉強ができるわけだ。

塾生3 もちろん。まあ、地球上のことは殆ど知り尽くしたからな。これからは宇宙そのものが俺たちの教科書になるってわけだ。

ヒロ しかし、この巨大な建物が本当にそのまま宇宙へ行くのかね。

塾生3 一見、非現実的だが俺達には確かなビジョンがある。

ヒロ ほう。

塾生3 俺たちの開発したエンジンはアポロ計画のサターンファイブに搭載されたF-1を参考に作ったんだがね、推力はその10倍ある。世界最強のロケットエンジンなんだ。

ヒロ それだけ強力だと比推力が落ちて燃費が悪くならないか？

塾生3 分かってるじゃないか。俺はその問題を克服するのに10年掛ったよ。

ヒロ 君は何歳なんだ。

塾生3 今年16になる。

ヒロ いつか、君みたいなやつに会えると思った。

塾生3 僕もだ、友よ。

先生 うーん、青春ですなえ。

ヒロ 打ち上げはいつなんだ？

先生 準備はもうできてますからね。えーっと……一時間後かな。

ヒロ 待ちきれないな。

先生 私もワクワクしてきましたよ。塾講師として宇宙へ飛び立つ日が来る
とはね。

○ロケット発射

風の音。

塾生2 打ち上げ開始一分前です。

塾生1 59、58、57、56、55……

ヒロ(独白) なんて素晴らしいのだろう。僕のための場所はすでに用意されていたのだ。僕の知らない間に。ああ、なんて素晴らしいのだろうと僕は心の中で繰り返した。この場所では誰もが目的をもって学んでいる。毎日毎日与えられた情報を家畜のように喰らい、学んでいるようなポーズだけとって実際にはますます知性を劣化させ、そうして目の前の現実に関われただだ漫然と凡庸さに飲み込まれてく間抜けな級友たちとは全く反対だ。

僕は、彼らと宇宙へ行きたい。いや、宇宙へ行くのだ。

塾生1 20、19、18、17、16、15、14

塾生2 フライトモード、オン。駆動用電池起動。システムオールライト。

塾生1 7、6、5、4、3、2、1、0

塾生2 リフトオフ！

「ゴー」というエンジン音。

塾生1 1、2、3、4、5……。

ヒロ(独白) こうして僕らジェット推進学塾の塾生たちは、宇宙へ飛び立つたのである……。そうか、これが宇宙か。教室の奥の三層強化ガラスの小窓から外を覗いて、ああ、地球は青いなと、天才にはふさわしくないほど

凡庸なことを僕は思った。

ヒロ 「地球は青かった」……それにしても速いなあ。地球がもうあんなに小さい。地球……みんな元気かな……別に寂しくはないが。あの青い光もいずれ見えなくなるだろう、恒星の放つ光に比べると惑星の反射光はあまりに儂い。

塾生3 やあ、ヒロ。なにか見えるかい？

ヒロ 星が見えるよ。

塾生3 凡庸な答えだな。

ヒロ 宇宙に来てみると、どうも凡庸なことが言いたくなるらしい。

塾生3 「地球は青かった」……ガガーリンか。

ヒロ そのセリフもさっき言ったよ。

塾生3 ガガーリンは偉大だよ。そして、偉大さと凡庸さは表裏一体だ。

ヒロ そうかね。

塾生3 まあさ、そのうち何か面白いものが見つかったら教えてくれよ。

ヒロ ああ見つかったらな。あ？

塾生3 ん？

ヒロ ああ、あ？

塾生3 ……どうした？

ヒロ あ、あれ？ あれ、なんだ、こっちに来てないか？

塾生3 は？ ん？ ああ？ なんだありや。

ヒロ ひよっとするとなんだが、

塾生3 ひよっとすると？

ヒロ ひよっとするとあれはユー、あのユー、あ、つまりあのユーフォーじや、あるまいか？

塾生3 にはしては変な形だよ。ありや、建物みたいじゃないか。

ヒロ 僕たちの言えた義理かよ。塾のビルをそのまま宇宙に飛ばしたんだぞ。

塾生3 あれは、建物で言うところあまり背は高くないが横幅はやたらと広いね。

ヒロ あれ、なんだか見たこと……。

塾生3 おいおい！ によるよろしたやつがハッチをあげて一匹出てきたぞ。

ヒロ あいつらは宇宙空間でも生きられるんだ。嫌気呼吸をする宇宙生物な

のかな。

塾生3 らしいな。いや、あれは宇宙服じゃないか？

ヒロ だとしたら中身は人間？

塾生3 俺たち以外であんな馬鹿でかい宇宙船を飛ばせる人間がいるかなあ。
ヒロ いや、それは考えにくい。僕たちのような選ばれた天才はそうざらに
いるもんじゃないよ。

塾生3 そうだよな。こう言っちゃなんだが、俺たちのやってることは完全
なオーバーテクノロジーだからね。千年後の人類ならまだ話が分かるが。

ヒロ 異星人が妥当な線だろうな。

塾生3 だな。

ヒロ おい、こっちに手を振ってるみたいだ。

塾生3 手を振り返してみよう。

ヒロ おーい、おーい！

塾生3 おーい！ こっちだ！ って音は伝わらないよ。真空なんだから。

ヒロ そりゃそうだな。

塾生3 あいつら、なんだか笑ってるみたいだな。

ヒロ そうかな。

塾生3 そんな気がする。

ヒロ 友達になりたいのかもしれない。

塾生3 確かに。ちょっと宇宙船を近づけてみよう。

ヒロ よし、異星人との異文化交流だ。

宇宙船が移動するヒューンという音。

塾生3 ここからだとよく見えるな。

ヒロ ああ。

塾生3 窓の向こうで宇宙服を脱いでる奴がいるぞ！ やっぱ人間だった
んだよ！ ほら、こっちみて笑ってる。俺たちの同胞だ。

ヒロ あー！！！！

塾生3 どうしたんだヒロ！

ヒロ あれは僕の知り合いだよ！

塾生3 どういうことだ。

ヒロ やつらは……僕の通っていた高校の後輩たちだ！

○入学式演説

始業チャイムの音。

校長以外の全ての登場人物が等間隔に並び、制服を羽織る。

校長、登場。

拍手。

校長 どうも、ご紹介に預かりました校長のアークです。新入生諸君、入学おめでとう。超難関入試を突破してわが校に入学してくれた君たちにまずは労いの言葉を掛けたい。君たちにはすでに高い目標に向かって邁進する意志と、あらゆる困難を突破する力が備わっているはず。君たちは人類の将来を担う選ばれた人間だ！ うちジェット推進学高校です。当然、優秀な君たちにはジェット推進学校生としての自覚を持っていただきたい。コンビニの前でたむろしたり、カツアゲをしたり、酒や煙草に溺れてはいけません。うちはジェット推進学高校です。塾も予備校も必要ありません。自習室はいつでも開放しています。自主性を重んじる伝統あるジェット推進なのです。上級生も下級生も関係ありません。日々努力する意思のある者だけが宇宙的な高みへと辿り着くのです。今年度は特にジェット推進分野を重点的に強化し、ジェット推進におけるゲームチェンジャーとして国際的にも高い研究力と競争力を持った高校を目指します。君たちはその旗手だ！ うちジェット推進学高校です、塾も予備校も必要ありません。君たちは選ばれた人間だ！ 塾も予備校も必要ありません。うちはジェット推進学高校として地域社会と連帯し、世界をリードするロケット産業の根幹を築いていきます。うちはジェット推進学高校です。塾も予備校も必要ありません。

幕。